

氏名(本籍)	あき 穂	やま 山	あらた 新(茨城県)
学位の種類	博士(社会学)		
学位記番号	博甲第4539号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	ナショナリズムと中国の近代 -清末民国初期の知識人における「民」の表象の歴史社会学-		
主査	筑波大学教授	博士(社会学)	奥山敏雄
副査	筑波大学教授	博士(人間科学)	土井隆義
副査	筑波大学准教授	博士(社会情報学)	野上元
副査	早稲田大学教授		園田茂人
副査	法政大学准教授	Ph.D.(社会学)	佐藤成基

### 論文の内容の要旨

本論文は、近代という時代において「中国」というナショナルな表象を通じて行なわれる思想・運動および心情の表現が、いかにして正統的な力とリアリティを獲得するようになったのかの因果連関を解き明かそうとする、歴史社会学的な研究である。

中国のナショナリズムに関する既存の研究は、「国民国家」や「中華民族」などの概念を手がかりにして、ナショナリズムをめぐる言語的な秩序や構造を解読することに傾注してきたが、ナショナリズムへの強力なリアリティが何に由来するのか明らかにしてこなかった。それに対して本論文の目標は、ナショナリズムを語る知識人の存在そのものを分析の対象とし、彼らが経験および体験したことに基づく心情やリアリティから、ナショナリズムの社会的な力を解き明していくことにある。具体的には梁啓超、孫文、陳独秀というナショナリズムの問題に最初に直面した、清末民国初期の時代における三人の知識人を主に取り上げ、特に「民」(people)をいかに代表=表象(represent)していくかという民主主義的なプロジェクトの側面から、彼らのナショナリズムを分析していくものである。知識人のリアリティと心情を分析していくための具体的な枠組みとしては、(1)知識人を取り巻く物理的・人的な環境(社会的な場)、(2)知識人が直面した歴史的事件の経験、(3)知識人が拘束されている伝統中国的な社会制度や文化体系という三つの要素に焦点を当て、それらが「民」としてのネーションの結晶化に当たっていかなる因果連関を構成していたのかを検討していく。

本論文では、中国のナショナリズムが以下のようなダイナミックなプロセスにおいて、構成/再構成されていったことを明らかにした。

第一には、国家という統治組織を枠組とする「国民」のナショナリズムである。「挙人」という科举制度におけるエリートであり、1898年の戊戌変法では清朝の中で活動していた経験もあった梁啓超が、日本に亡命して福沢諭吉などの日本のナショナリズム文献に影響を受けると、自ずと立憲君主制による「国民」の形成を構想するようになる。梁啓超は中国における「国民」の形成を阻害している要因として、伝統中国における「専制」の体制において日本の「藩」に当たる中間集団の力が脆弱で個人が分散的・自由放任であ

ることが政治的意識の成熟を妨げたことを指摘した。この問題を解決するために梁啓超が下した結論は、「開明専制」という既存の「専制」国家の主導による「国民」形成という逆説的なものであった。梁啓超にはネーションを自然発生的な集団としてではなく、国家によって政治的に構築されるべき「国民」という政治機能的な理解があったが、これが「緩やかな集権」と表現し得るような伝統中国的な国家体制への認識と絡み合っ、て、「開明専制」の公定ナショナリズム論が帰結することになった。

清朝も1900年代を通じて、梁啓超が論じてきたような「国民」の公定ナショナリズムを政策的に実行していく。この政策の特徴は、王朝国家の統一性を維持してきた科挙制度を廃止すると同時に、諮議局という地方議会の設置が先に行なわれたように、政策の実行を地方の官僚やエリートの自主的な運営に委ねたことにある。これは部分的には「緩やかな集権」の伝統に基づくものであったが、このことは国会の早期開設などをめぐる地方エリートの発言権を高め、鉄道国有化などの集権化政策に対する反発や抵抗の力を強めて清朝の崩壊を帰結させることになった。梁啓超の議論は国家の帰属化政策に対する「国民」の支持や服従を前提にしていたが、これは清朝国家の現実に即したものでは全くなかった。

第二には、特に「漢族」のエスニックな価値や文化を要素とする「民族」のナショナリズムである。中国における「民族主義」を代表する人物として言及されてきた孫文は、ハワイの華僑社会というエスニックなネットワークを、革命運動を展開していくための拠点としていた。しかし、孫文が「民族」というエスニックなカテゴリーによってネーションの自己理解を行っていくのは、1900年代前半に急増していた日本留学生の間における民族革命論の盛り上がりに影響されてからである。留学生たちの「民族主義」は単に出自や血統に基づくものではなく、一つには留学生の同郷組織を通じて強められた郷土に対する帰属意識と、もう一つは留学生集団における「中等社会」という階層的な自意識によるものであり、それは中央に居座る満州人政権の「上等社会」に対する「漢人＝民族」の自己理解を構成するものであった。

1911年の辛亥革命に至るプロセスは、こうした「民族」の地域的および階層的な自己理解が大きな役割を果たした。孫文をはじめとして革命知識人は「下等社会」の非識字層である地方の秘密結社の動員を図り、「漢」「民族」を「中等社会」と連携させる表象として用いていく。それと同時に、革命派の知識人が清末新政下で分権化が進んでいた地方（省）の軍隊に入隊していくという戦略を採り、これが成功して省が清朝から軍事的に独立する際には、「漢」「民族」のエスニック・ナショナリズムの理念が掲げられていくことになる。しかしこの「成功」は、地方から中央政府の権限を掘り崩していくというものであったため、革命後に孫文は「漢」「民族」が政治的な統合にとって有効ではないという現実に直面し、「五族共和」による脱「民族主義」の方向性を模索していくことになる。

第三には、群衆を担い手とする「人民」のナショナリズムである。「中華民国」の大総統となった袁世凱政権の下では、「人民の公意」の下に孫文の国民党など敵対的な勢力が「私党」として排除される一方で、中国皇帝と王朝国家の正統性を表象する宇宙論的な都市空間であった、首都・北京の祭壇や街路を開放することによる「国民」の表象＝代表が目指されていく。この近代的な都市空間には、大学という高等教育機関の創設による学生・教師や、陳独秀のように袁世凱政権から追放されたジャーナリストなどの知識階層が活動する場となる。陳独秀は道徳的・文化的な水準での自己革新という「国民運動」によって、袁世凱政権を生み出した「旧思想」の打破を主張し、学生たちは「国民」を特権的に代表する「少数」のエリート集団としての期待を背負いつつ、都市の街頭に繰り出して一般市民＝「平民」への啓蒙的な講演活動などを試みていく。

1919年の五四運動という群衆的なナショナリズム運動は、以上のような、自由で大規模な形での集散や往来が可能になった近代的な都市空間の形成と、そこを活動の舞台とする知識階層の成長との絡み合いによって可能になった。この事件を北京で体験した陳独秀は、都市群衆こそが既存の国家権力に対抗し得る潜在的な力を有するものであることを確信し、「人民」による「愛国心」という、法律制度や議会政治をも否

定するような群衆的な「民」のダイナミズムの中に、ナショナリズムの集合的な力の基盤を見出していく。その政治的な方法論として、陳独秀は都市労働者の運動の理論であるマルクス主義へと急速に接近し、1921年に中国共産党を結成していくことになる。

最後に、1920年代の政治的な季節の中で、群衆的な「人民」のナショナリズムが、「国民」「民族」の表象と絡み合っていくことになる。梁啓超は一次大戦の惨劇への反省によって国家の主導的な役割への期待を放棄し、五四運動をモデルとして「市民の群衆運動」による「国民」の確立という主張を展開していく。共産党の総書記である陳独秀は、アナーキストとの論争の中で労働者階級が支配する国家による「開明専制」を正当化し、孫文の国民党との合作以降は「軍閥」「帝国主義」に対して国内の労働者と資本家が共闘する「民族主義」を唱えるようになる。1919年に国民党を再建した孫文は、「漢族」を中心として少数民族を同化・融合させる「中華民族」論を展開し、国共合作後の1924年の「三民主義」講演では「緩やかな集権」の伝統的条件への認識に基づく「国家の自由」という、梁啓超と同様の議論を展開するとともに、「全民政治」や「国家は人民の公有」というマルクス主義的な理念を「天下為公」や「大同」といった伝統中国的な理念から正当化している。多くの矛盾やアポリアを残したままではあったが、孫文はこうしたアクロバティックな方法によって、「民族」としてのネーションの表象と「国民」「人民」との集大成を試みたのである。

以上のように、知識人を取り巻く社会的な場、歴史的事件の経験、伝統的条件の拘束などの分析から彼らの抱いた心情やリアリティを読み解くことで、中国におけるナショナリズムの形成と展開が「国民国家」と「中華民族」の政治的・文化的な統合や均質化というプロセスによって説明できるものでは決してなく、ネーションの表象における国家やエスニシティの有効性が伝統的条件の制約などによって否定され続ける紆余曲折のプロセスを明らかにしてきた。そうした試行錯誤の中で、共同体や組織化の論理を超えた群衆的な「人民」のダイナミズムに積極的な可能性が見出されていくのであり、この経験に基づいて「国民」「民族」としてのネーションが表象する意味も再構成されていくというダイナミックな軌跡を、以降の中国におけるナショナリズムと「近代」は歩み続けていくことになるのである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は近年のナショナリズム研究の検討を通じて新たな分析視角を提示したうえで、それを近代中国の歴史的事例に適用した歴史社会学的研究であり、理論的、実証的、両側面にわたって独創的な研究である。本論文は、単に従来なされてこなかった領域を埋めるだけではなく、特に「国民」「民族」「人民」という三つのネーション概念の展開とせめぎ合いを、予定調和的ではなく、それらの概念の多義性や、偶発的事件による断絶を含むジグザクの展開を明らかにしている点において高く評価することができる。ただし、日本などの外部との関係が中国に与えた影響や、1920年代のナショナリズム形成が毛沢東以降および現在に具体的にどのようにつながりうるのか十分に明らかにされていないなどの点に課題を残しているが、特に後者は本論文の問題設定の枠を超えるものであり、本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。